

編集後記

「植物と人々の博物館」のある山梨県小菅村は、東京（小金井市）で暮らしていたときに何度か訪ねた。温泉があって、道の駅があって、わさび、こんにゃく、ヤマメ、そして雑穀の畑など、大いに魅了されて帰途に着いたものだった。中心部に多摩川源流のひとつである小菅川が流れ、集落には小さな宿もあり、土地の人たちとの会話にも癒やされた。

この11号（p78-79）で、改めて小菅村の人口を知り驚いた。私がいま暮らしている四国愛媛県の南部にある大洲市大川地区とほぼ同じなのだ。同ページによると、小菅村（平成28年9月1日現在）は人口740人、うち65歳以上が45%。一方、わが大川地区（平成30年5月末現在）は、人口782人、うち65歳以上が48%。面積を比較すると、小菅村は52.65km²、大川地区は28.5km²であるから、小菅村のほうが倍近く広い。大きく異なるのは標高で、小菅村は多摩湖湖面の535mから大菩薩連峰の妙見の頭の2,057mの間に位置するというが、大川地区は最も低い川の水面が約30m、一番高い山頂で650mほどである。ただし、冬には雪が降り、年に数回20cmほど積もる。

大川地区は大洲市の中心部から12kmほど離れた山中にあり、ほとんどの住民は、平日は大洲の中心部に勤めに出て、週末に農作業をする兼業農家である。子どもの姿をほとんど見ることのできない大川地区では、小学校は平成26年3月に閉校し（中学校はその30年ほど前に閉校）、辛うじて市立保育所が残るだけになったしまった。また、大川地区中心部には肱川（総延長103km、瀬戸内の伊予灘に出る）が流れ、10年前から5月3日に「大川鯉のぼり祭」を開いている。小菅村でも5月4日に「多摩源流まつり」が催され、200mにわたって鯉のぼりが架け流されるようだが、大川の鯉のぼりも長さ200mが2連となっている。

自治体である小菅村と、自治体の公民館区にすぎない大川地区を比べるのは意味がないのかもしれないが、小菅村の元気さは本当にまぶしい。その元気さに「東京」という大都市との距離が影響しているのは違いない。しかし、それだけであろうか。小菅村に暮らす人たちは、本気になって自分達の将来を考えている。と、私には映る。というのも、大川地区で将来について語り合おうとしても「自分たちの力ではどうしようもない。なるようにしかならない」という声が大半だし、みんなで一つになって地域を盛り上げようという空気は希薄だ。（ただ、私が暮らす7軒14人の集落では「最後まで自分たちのできることをやろう」と、集落総出で草刈りやお堂での念仏講、立春の大わらじ作りなど、伝来の行事を守り伝えている。）

そんななか、平成30年度から2年間、大川地区では農林水産省「農泊」事業に取り組むことになった。持ち主から地元へ寄贈された古民家（元：醤油醸造元兼販売店）を整備して、2年後には古民家カフェ・レストランの開業をめざす。体験プログラムは、肱川のアユ漁（伝統の瀬張り漁）やカヌー、神社の秋祭り、椎茸の植菌・収穫体験など。宿泊は地区外の温泉宿（小藪温泉：秘湯でおすすめ）と提携する。私も関わっている地元NPO団体が実施主体だが、2年以内に地域全体で協議会をつくる必要がある。地域をいかに巻き込むか。地域の住民は、行動こそ消極的で諦念しているかに見えるが、将来への不安に苛まれているのは事実で、膝を交えながら確かな未来に向けた活動の輪を大きくしていきたい。そして、小菅村のみなさんに、いろんなことを教えていただきたいと思っている。・・・と意気込んでいたら、7月上旬の豪雨で古民家に甚大な被害が出た。計画を見直し、また新たな一歩を。

宮本幹江（2018年7月）

